

# 美術科学習指導案

日 時 平成25年 5月31日 (金)  
公開授業Ⅱ  
学 級 岩手大学教育学部附属中学校  
1年B組 40名  
会 場 美術室  
授業者 高橋 知志

1 題材名 風景写生画の制作～木の〇〇を表現しよう～ (A表現：水彩による風景画の制作)

## 2 題材について

### (1) 生徒観

これまでガイダンスを含めて3時間程度の授業を行った。始めに、美術に関する実態把握を兼ねて、鉛筆の削り方や簡単な描画の取り組みを行ったが、小刀やカッターなどで鉛筆を削った経験のある生徒はほとんどいなかった。削ったことのある生徒でも、「上手に削ることができる」わけではなく、教師の実演に目を丸くする生徒が大多数であった。また、「薄い線で見当(あたり)をつけてから描き進めていく」というような描画の基本的な技能が備わっていない生徒が多くみられた。

ガイダンスの時間ではこうしたごく簡単なことから指導を始めたのであるが、生徒の関心は高く、その後自分でも鉛筆をカッターで削る練習をしたり、うまくいかなかった描線を何度か練習して教師に見せに来たりという意欲的な行動が見られた。もともと図工の時間が好きであったという生徒も多く、中学校での学びに期待を膨らませている個人が多いと認識している。

写生会の取り組みであるが、前年度は主題である「木」について、写生会当日まで3時間程度かけて鑑賞や主題構想などの事前学習を行い、当日に臨ませた。その結果、スムーズに取り組むことができた生徒が多く、作品も技術的に一定の水準に達したものが多く出た半面、「似たような作品」が多く出てしまったように感じた。そこで今年度はあえて事前の学習を最低限度にして、現地での対象との新鮮な出会いやそこから感じる素直な感動を大事にさせ、より主体的に取り組ませたいと考えた。幸い校舎内には過去の作例が多数掲示されており、日常的に生徒の目に触れる環境が整っている。そうした作品に囲まれて1カ月を過ごした生徒が、写生会当日に現地でどのようなことを感じ、何を表現しようと思ひ、どう決定していくのかを観察したいと思っている。

### (2) 題材観

本校では毎年全学年で写生会の取り組みを行っており、夏休み前までの期間を使って授業の中で制作を進めている。写生会は学年ごとに午前中の時間帯を使って盛岡城跡公園に赴いて、実質2時間程度の取り組みとして実施している。例年、当日は各学年の職員が引率にあたるほか、岩手大学教育学部の学生(今年度17名ほど。その年に主免実習を行う学生)が実技指導に協力してくれている。また、写生会中は各学級の担任が学級の生徒の構図の写真を撮って回り、そのデータを後日出力して生徒に配付して制作の参考とさせている。このように、本校ではその日のうちに完成まで持っていく“全日”の取り組みにはせず、写生会後の授業の中で指導してきた経緯がある。

また、学年ごとに異なった目標を提示して取り組ませていくことで、自分自身の成長を確認させたいと考え、第1学年では「樹を主題とし、対象をよく観察して描くこと」、第2学年では「奥行きのある構図の表現」、第3学年ではより主題性のある「光と影を意識した、残したい心の風景」という制作目標を定めている。このように主題が異なるので同じ場所に行っても構図を決める観点が異なり、その学年ならで

はの作品作りとなっていく。また、授業では第1学年は「取り組み方を学ぶ」、第2学年では「互いに教え合ったり話し合ったりしながら取り組む」、第3学年では「自分自身で考え、決定して取り組む」、というように、取り組み方にも段階を設定している。

表現するにあたっては、生徒個々がなぜその風景を選んだのかということから構想を深め、参考としての写真はあっても、画面の中に自分の感情移入を最優先させて、描くものと省くものについて明確な意思をもって取捨選択するように指導したい。

さらに、3年間を通しての取り組みであることから、2回目、3回目と、自分自身の成長を自覚できるような、取り組みの記録の充実とふり返りの工夫もしていきたいと考えている。

### (3) 学びの自覚化とのかかわり

心理学の話であるが以前「三角形は四角形の存在を知ることによって己が三角形であることを自覚する」ということばを聞いたことがある。

風景画を描くにあたり、より個別化された主題設定をさせて思いをふくらませ、それを相互に交流させたい（他者との相違の自覚化）と考えている。他者との感じ方の相違を感じながら、「なぜその場所を選んだのだろうか」「この木の何に惹かれたのだろうか」というようなことを深めて考えること（思いの自覚化）を期待したいからである。そうして自分の制作イメージを十分に膨らませてやりたいと考えている。

しかしながら、思いを深めたり広げたりするほどに実際には下描きの段階から生徒は「思いと表現のギャップ」を感じ、ストレスを蓄積していく。そして、やがて「自分にはできない」と妥協してしまう。つまり、思いを深める、その次のステップに、学びの自覚化（課題の自覚化）を促していく手立てが必要なのではないか。

以下に教科論で述べた文言を引用する。

制作過程において課題となったイメージと表現のギャップを解消していく時、例えば以下のようなことを考えることで次に何をどう工夫していけばよいのかを考えるきっかけとすることができるであろう。

題材を通しては①題材設定の工夫、②学習内容の基礎基本の定着、③学習の中での生徒相互の共感的な意見交流の場面の設定を目指し、工夫することで伸ばすことができると考え、手立ての構築について研究を重ねてきた。そして現在では、表現領域でも鑑賞領域においても1単位時間の中での生徒の思考を「広げる」「深める」「まとめる」「個に返す」というよう流れで展開していくように努め、経験を重ねることで批判的思考力を高めていくことを実践の中心に据えている。

中でも活用したいのが「ふり返りシート」である。一斉授業で示す学習課題（学習テーマ、めあて）を受けながら、生徒個々が「今日はここをがんばってみたい」というような個人課題をもって授業に臨めるように、次の時間に確実につながっていくふり返りをさせるように工夫してみた。

○ふり返りシートの様式 ※3学年共通

月	学習課題：(導入段階の一斉指導で示される課題・テーマ・めあてなどを記入する)		CHECK
	今日の個人キーワード：(前時の自分のふり返りや本時の課題を受けて考える)		
日 ( )	今日の ふり返り	(授業の終末段階でふり返る。感想で終わらせない)	
	次回までの 個人課題	(次の時間までに考えてきたいことや解決しておきたいことなど)	

留意事項として

- ・短時間で書けるものであること
- ・前回のふり返りを見れば本時の自分の課題を設定しやすいようにしたいこと
- ・教師が各自のふり返りを集約し、次時の全体指導に役立てることができるようにすること
- ・ふり返りは感想に終始させず、わかったことやできたこと、あるいはその逆といった、学習活動

の内容についてのふり返りにさせたいこと。

- ・これを定着させ、教師がうまく活用することによって授業の導入と終末の時間配分を短縮させていきたいものであること。

### 3 題材の指導目標

#### (1) 指導目標

- ①木を主題にすることにより、身近な自然のよさや美しさに対する関心を持たせるとともに、意欲的に美術の基礎的能力を身につけていこうとする態度を養う。
- ②豊かに発想し構想する能力を育み、形や色の構成を工夫して自分らしい表現させる。
- ③形体や色の表し方など基礎的技能を身につけさせるとともに、感性や想像力を働かせて表現意図に合う多様な表現方法を工夫させる。

#### (2) 評価規準

美術への関心・意欲・態度	①身近な自然からよさや美しさを発見して関心を持つとともに、意欲的に美術の基礎的能力を身につけて、それを生かした表現活動に取り組んでいるか。
発想や構想の能力	②主題をもとに豊かに発想し、形や色の構成を工夫して自分らしい表現を構想しているか。
創造的な技能	③形体や色の表し方など基礎的技能を身につけ、感性や想像力を働かせて表現意図に合う多様な表現方法を工夫をしているか。

### 4 題材の指導計画及び評価計画

時間	主な学習内容と学習活動	評価規準	評価方法
1	○ガイダンス ・写生会の取り組みについての概要を理解する (主題や当日の日程、留意事項等について)		
2	○写生会当日の取り組み ・主体的に描きたい場所を選定し描き始めることができる。 ・木から感じたことを大事にしながら自分らしい画面構想をし、下描きを進めることができる。	① ② ③	観察法・作品法 観察法・作品法 作品法・自己評価法
2 本時 1/2	○下描きの取り組み ・当日のふり返りをもとに、自分の主題を確認し深める。 ・表したい主題を強調するために、どのような工夫をしていきたいかを考える。 ・対象物の主従の関係を考えながら描き込みを進める。 ・全体の感じをつかむようにあたり線を効果的に使って形体を描写していく。 ・細部を確認しつつ強い線も使用して下描きを仕上げる。	① ② ③	観察法・作品法 観察法・作品法 作品法・自己評価法
5	○彩色活動 ・彩色の計画を立て、基礎的な技能について、できることやできないこと、できるようになりたいことなどをまとめ、今後の課題設定をする。	① ② ③	観察法・作品法 観察法・作品法 作品法・自己評価法

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠景から彩色していく。</li> <li>・重色や混色で色彩を深め、主題に迫っていく。</li> <li>・完成度を高めていく。</li> </ul>		
1	<p>○まとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で定めた個人課題についてふり返る。</li> <li>・相互に鑑賞する。</li> <li>・取り組み全体をふり返り、まとめる。</li> </ul>		

## 5 本時について

### (1) 主題 「自分の表現主題を確かめ、これからの下描きの進め方を考えよう」

#### (2) 指導目標

当日のふり返りをもとにしながら、「なぜその場所を選んだのか」ということについて考え直したり交流したりすることで、制作に対するより強い思いを抱きながら今後の構想をすることができるようにする。

#### (3) 本時の評価規準

- ・当日のふり返りをもとにして思いを掘り起こし、作品に表したい主題について構想を深めていくことができる。
- ・表したい思いを表現するために、今後どのように下描きを進めていけばよいか考え、自分自身で課題を設定することができる。

#### (4) 指導の構想

本時は写生会当日を終えてから初の授業となる。当日はほぼ半月前に取り組んだため、大半の生徒は当日の感動や作品制作についての思いが薄まっている状態であることが予想されることから、この状況で画用紙を渡してすぐに続きに取り組ませると、参考写真の再現だけを制作の目標としてしまいかねないと思われる。学校での制作が本格化していくにあたり、生徒の「思い」をしっかりと再構築していくことが重要であると考えた。

当日の記録プリントの記述を見ると、今回の主題である「木」から生徒が感じ取っているのは、生命力、力強さ、大きさ、季節感、歴史など、様々であった。これらの要素を作品に豊かに表現していくには、観察も大事であるがそれ以上に、感じたことを大事にして思うままにデフォルメしたり強調したりという、より創造的な取り組みを期待したい。

そこで本時は、当日のプリントをもとにして生徒個々の思いを再構築し、目の前にある下描き中途の作品とあらためて向き合い、これからの制作のモチベーションを高めるとともに、取り組みの見通しを持たせる時間にしたいと考えた。

(5) 本時の展開

段階	学習内容及び学習活動	時間	■学びの自覚化との関わり
導 入	0. 3分前学習 ・写生会当日のふり返りプリントの黙読		
	1 写生会当日のふり返り ・どんなことをがんばったか ・観察して何を感じたか ・表現したい「木の○○」 2 本時の課題把握	10	■思いを交流しあい、他者との感じ方の相違を自覚する。
<b>自分の表現主題を確かめ、これからの下描きの進め方を考えよう</b>			
展 開	3 表したいことを絵の中で表現していくために どのようなことを考えたか、出し合う。 ・観察が足りない ・思い通りに描けない ・細部にこだわりたい ※「自分は○○を表現したいので、○○を○○と 考えている」というように発表する。	5	
	4 今日の個人目標を考え、制作を始める。 ・実景写真を参考にして描き進めていく。	20	■自分の制作についての課題を言語化する。
	5 深める ・やってみてどうだったか、できたことやできなかったこと、これからできるようになりたいことなどを考え、発表しあう。 ※気付いたとはその場でメモしていく。	7	■はじめに立てた自分の目標についての取り組みを客観的に振り返る。
終 結	6 まとめる 学習プリントでふり返る。 ・自分の表現主題を確かめることができたか ・下描きを進めていく上でクリアしていきたい課題を明らかにすることができたか ・次の時間の自分に向けたメッセージを考える	8	■制作上の課題を自覚化し、個々に意欲を持つ。

